

『西東詩集』の詩「再会」について

長谷川 茂夫

一

「再会」は、『西東詩集』から唯1編、1827年の連作『神と世界』に収められた教訓詩である。ハラーは、教訓詩連作というゲーテの計画を、かなり以前からのものであった、としている¹⁾。しかし、『西東詩集』での「再会」は、長い準備の後に出来上がったものではない。それは、ゲーテとマリアンネ・フォン・ヴィレマーとの愛の交流から、1日にして生まれ出た機会詩である²⁾。この、教訓詩であり同時に機会詩であるという特性は、この詩に独特の構成を与えている。すなわち、恋人との再会を歌った第1節から、第2節が、「突然自然哲学的教訓詩へと移行³⁾」している。本論では、機会詩としての観点から、この「移行」が必要不可欠なものであり、また、そこに述べられる思想的部分が創作時のゲーテの心理を反映していることを、明らかにしてゆきたい。そのためには、まず詩の成立事情と、そこでマリアンネの果たした役割を述べ⁴⁾、次に具体的な詩句を考察するつもりである。

二

マリアンネ・ユングは、1784年にオーストリアのリンツに生まれた。1798年の秋に母と共にフランクフルトへ移り、14才にしてバレーの舞台に立った。彼女は、歌と芝居の才能と愛すべき人柄によって多くの轟負を得たが、そのなかに、フランクフルトの市参事会議員であり、プロイセンから枢密顧問官の称号を受けている通俗哲学者のヤーコプ・フォン・ヴィレマーがいた。彼は、1800年に、16才のマリアンネを引き取り、以前の2度にわたる結婚で生まれた娘たちと共に、自宅で養育させた。その後、1814年のライン旅行でゲーテがフランクフルトを訪れ、ヴィレマー家の人々と面識をもつまで、マリアンネは養女という身分のままであったが、ゲーテがそこからハイデルベルグへ発った僅か3日後の9月27日に、ヴィレマーは、マリアンネと結婚している。この結婚は、決してマリアンネの方から望んだものではなかったようである。ゲーテが結婚前の2人の関係をどのように解釈していたかについて、ピューリッツは、彼自

身とクリスチアーネとの関係を連想していただろう、と推測し、しかし実際の事情については、未決定のまま留めるべきだ、としている⁵⁾。

同年10月11日に、ゲーテはフランクフルトへ帰り、足しげくヴィレマー家を訪れたが、この時期には、マリアンネとの間に決定的な感情の交流はなかったようである。しかし、ライプツィヒ会戦の祝賀記念に打ち上げられた花火を共に眺めた18日の夜が、後年まで2人の思い出の日となり、「秘かに成長した感情」が、抑えがたく意識されたに違いない、とピューリッツは述べている⁶⁾。

翌1815年5月24日、再度のライン旅行へ出立する日に、ゲーテは、期待に満ちたズライカ命名の詩⁷⁾を歌い、また「覚醒した意識をもった自己風刺^{8a)}」を備えた「気安め^{8b)}」を作った。この日、明確にマリアンネは、「ズライカ書」の「詩想を促す中心点⁹⁾」となったのだが、それからのゲーテの行動は、現実のマリアンネを避けていたように見える。26日に彼はフランクフルトに到着し、ヴィレマーには何の連絡もしないまま、翌日そのまま出発、漸く29日になって、ヴィースバーデンから知らせを届けた。折り返しヴィレマーは、来宅を願う手紙を出す、ゲーテは、そこから動こうとしなかった。やむなくヴィレマーの方から、7月3日にゲーテを単独で訪問し、その結果「ゲーテを上気嫌にさせた。¹⁰⁾」翌月の7日、ヴィレマーが送った再度の督促の手紙と入れ違いに、ゲーテはゲルバーミュレ訪問の意図を告げ、12日に同地にあるヴィレマーの別荘に到着した。以後9月17日まで、ゲーテはヴィレマー家の客、「というよりはむしろ陰の主人¹¹⁾」となる。この5週間のうちに、ゲーテのマリアンネに対する気持ちは、情熱と呼んで差し支えないものに成長してゆき、ハイデルベルクでの再会にその進りを見るのだが、その成長過程は単純なものではない。ゲーテの感情の推移を理解するには、ここで、詩集全体においてマリアンネの帯びていた意味を、創作の最初の時期まで振り返って考察することが必要である。

『西東詩集』制作にあたって、ゲーテは、ナポレオン戦争で混乱した西方から、「純なる東方¹²⁾」へと逃れようとした。この「東方」は、彼の「教養体験¹³⁾」の世界であり、精神としての老齡¹⁴⁾の世界である。この世界で、老人の精神を備えたままの「若がえり¹⁵⁾」を望むゲーテは、そこに恋の要素が必要である、と考えていた。この意図を、ゲーテは既に第1回目のライン旅行出発時に陳述している。

「たとえ髪の色が白くとも

お前は恋するのだ。¹⁶⁾」

恋を「予定」することは、『西東詩集』においては、何らの感情の冒瀆でも

なく、愚かな自己欺瞞でもない。それは、「東方へ」逃れることが、東方の宗教的感情に身を委ねることをも意味するからである。そこでの神は、絶対的な帰依（イスラム¹⁷⁾）を要求し無条件で命令を下す意志として受け取られ¹⁸⁾、詩的世界を創造する際の詩人の意図は、この神の意志を代行するものなのである。逆説的ではあるが、この予定説の世界では、自らの詩的意図を運命として受け入れることが、全も自然な感情の方向となる。

この高度に洗練された知的遊戯の相手にマリアンネは選ばれ、東方的仮装として、「ズライカ」の名を与えられた。ここに、彼女は「いわばプログラムにあった役割を引き受けた¹⁹⁾」という意見の妥当性がある。マリアンネは、ひたすらゲーテの西東的意図に添うよう努めたい。8月28日のゲーテの誕生日に、彼女は、月桂冠に飾られたモスリンのターバンを贈り²⁰⁾、9月には、フランクフルトの大市で、トルコの日月勲章を買っている²¹⁾。

しかし、ゲーテのめぐりあった女性が他ならぬマリアンネであったことは、「思慮と意志を越えた……運命²²⁾」であった。彼女の詩的才能と、発露の機会を失っていた情熱は、この「優美なミュピール²³⁾」に、思わぬ危険性を与え²⁴⁾、愛は真剣さの度合を深めてくる。9月16日と17日に、マリアンネが、ゲーテの「神と遊女²⁵⁾」を「特別の情緒と感動をこめて²⁶⁾」歌ったとき、それが「マリアンネの前歴そのままである²⁷⁾」ゆえに、強くゲーテを揺り動かし、彼は、「もう決してその詩を歌ってほしくない²⁸⁾」と思った²⁹⁾。ブランデスは、この事情を、「愛によってではあるが、しかし痛ましい方法で、より豊かな存在へと高められる舞姫の物語は、彼女に過度の感動を与え、己れの身の上を思い起させたに相異ない³⁰⁾。」と述べている。マリアンネの心中で自身が舞姫であるのならば、神は、ワイマールの詩神ゲーテである。ゲーテがそれを推察し、もう歌ってほしくないと思ったのは、結果的に自らを神に喩えられたことを否定したい気持ちばかりではなく、そこに示された情熱に、ハーテムとズライカという西東的仮装の埒を越えた、ゲーテとマリアンネという関係を求める無意識の希求を、認めたからであろう。

同質の事例は、詩の次元においても、見うけられる。すなわち、同じ17日の日付けを持つ「私がオイフラートに舟を浮かべたとき³¹⁾」が、ヘルマン・グリムの推測するようにマリアンネの手によるものであり³²⁾、Morgenröte に対する韻として、最初は Goethe と置かれていたのならば、それは、この時点でズライカの仮面を捨てたマリアンネの大胆な挑戦である³³⁾。

このようにして「ゲーテとマリアンネとの間の恋物語が、ますます『真剣さを備えた戯れ』となってゆく³⁴⁾」につれて、ゲーテは、その危険性の認識を深

める。彼は、翌18日の午後、帰途での再会を約しつつ、カール・アウグストと落ち合うため、ハイデルベルクへ向ったが、ピューリッツによれば、既に9月12日の時点で、ゲーテは、ヴュルツブルク経由で直接ヴァイマールへ帰る計画を立てていた。「すなわち、彼はその時すでに、マリアンネとの究極的再会から逃れることを考えていたのである。⁸⁵⁾」それゆえ、23日のハイデルベルクでの再会は、ゲーテにとって全く予想外のことであり、それが「全く無防備な瞬間のさなかに起きた⁸⁶⁾」ことを、次のボアスレーの報告は、如実に示している。

「昼、食卓についていたとき、突然にヴィレマーが来る。……私たちがしばらく座ったままで最初の不意打ちから立ち直ったあと、ゲーテが突然飛びあがる。私は、彼を部屋まで追っていく。⁸⁷⁾」

ゲーテが、この時ボアスレーに与えた説明 —「御婦人たちがホテルで待っているあいだは、食事をとるわけにはいかない⁸⁸⁾」— は、言いわけである。ゲーテは、この出来事に含まれている危険性を理解し、究極の危機から無意識的に逃げだそうとしたのではなからうか。「再会」とは、まさしくこのような危機的状況が生みだした機会詩なのである。

三

WIEDERFINDEN

Ist es möglich! Stern der Sterne,
Drück' ich wieder dich ans Herz!
Ach, was ist die Nacht der Ferne
Für ein Abgrund, für ein Schmerz!
Ja, du bist es! meiner Freuden
Süßer, lieber Widerpart;
Eingedenk vergangner Leiden,
Schaudr' ich vor der Gegenwart.

Als die Welt im tiefsten Grunde
Lag an Gottes ew'ger Brust,
Ordnet' er die erste Stunde
Mit erhabner Schöpfungslust,
Und er sprach das Wort: „Es werde!“
Da erklang ein schmerzlich Ach!

Als das All mit Machtgebärde
In die Wirklichkeiten brach.

Auf tat sich das Licht! So trennte
Scheu sich Finsternis von ihm,
Und sogleich die Elemente
Scheidend auseinander fliehn.
Rasch, in wilden, wüsten Träumen
Jedes nach der Weite rang,
Starr, in ungemessenen Räumen,
Ohne Sehnsucht, ohne Klang.

Stumm war alles, still und öde,
Einsam Gott zum erstenmal!
Da erschuf er Morgenröte.
Die erbarmte sich der Qual;
Sie entwickelte dem Trüben
Ein erklingend Farbenspiel,
Und nun konnte wieder lieben
Was erst auseinander fiel.

Und mit eiligem Bestreben
Sucht sich, was sich angehört,
Und zu ungemessenem Leben
Ist Gefühl und Blick gekehrt.
Sei's Ergreifen, sei es Raffen,
Wenn es nur sich faßt und hält!
Allah braucht nicht mehr zu schaffen,
Wir erschaffen seine Welt.

So, mit morgenroten Flügeln,
Riß es mich an deinen Mund,
Und die Nacht mit tausend Siegeln
Kräftigt sternenhell den Bund.

Beide sind wir auf der Erde
 Musterhaft in Freud' und Qual,
 Und ein zweites Wort: Es werde!
 Trennt uns nicht zum zweitenmal.³⁹⁾

第1節は、恋人との「再結合」を歌ってはいるが、そこに表出されているものは危機感であり、精神を備えた老人ゲーテから、あまりにも激しく自己主張をする青春の感情がまさに「分裂」せんとするさまを、示している。彼が「西東詩集」で目差した、精神を備えたままの若がえりが、ここでは破綻に瀕しているのだ。「ありうることか!」という叫びを、「(詩人は) 再会を何か理解しがたいこと、予期されないこととして受け取っている」と、イーエックヴェアツァーが述べているのは、正しい⁴⁰⁾。それは、同じ感嘆で始まり、遙かに軽やかな響きを持った詩⁴¹⁾の場合と同様に、unbegreiflich なものを前にして、感性の最大限の活動を要求されたときの、困惑の叫びである。また、恋人との再会という現在の幸福そのものが、過ぎ去った別離の夜を、耐えがたい苦痛として甦らせる原因でもある。更に、再度の別離への恐れも加わり、これらの相反する感情が現在という一点に収斂して⁴²⁾、まさに理解を越えようとしているがゆえに、ゲーテは、「戦慄 (Schauern)」という「人間の最上の持ち前⁴³⁾」によって、この危機を克服し、「彼の自己確信を求める心⁴⁴⁾」を満たそうとした。「つかみきたい幸福⁴⁵⁾」を真に自己のものとするために、ゲーテは、意識を個人の運命から全宇宙にまで拡大させ、全ての分裂の根本現象、すなわち「初めるとき」における万物の神からの分離を、考察する。

神の胸の奥底に世界があったとき、それは神の一部であったが、神が創造の言葉を発するや、万有は、痛ましい苦痛の叫びを響かせながら、荒々しい身振りで、諸々の現実へと別れ散ってゆく。

この第2節から、この詩の教訓詩の部分が始まり、シュタイガーは、「(ゲーテが) 彼の教義を述べるときの炎」を、「半ば情熱であり、半ばは教育的熱意である⁴⁶⁾」と言いあらわしている。この見解は、既に述べたように「再会」が後年『神と世界』に採用された事実から見て正しい。しかし、ゲーテがこの詩を生みだした時点での比重は、「情熱」にこそあった。詩の思想的要素・世界観は、ゲーテが自分自身の胸に刻みこむために、彼の教養体験の全領域を活性化させて、緊急に呼び起されたものなのである。それゆえ、その宇宙論は、出典の個々の部分が、オヴィディウスであれ⁴⁷⁾、シェリングであれ⁴⁸⁾、ドイツ敬虔派であれ⁴⁹⁾、「詩と真実 第8巻の末尾で彼が自己の幼少の頃の世界観だとい

って展開してみせた新プラトンの宇宙論⁵⁰⁾」のように、「神話的表象を自己の根本思想の着衣として利用した⁵¹⁾」ものである。その意味において、ブルダッハが、「しかし、内的統一と全体の理念は、ゲーテの極めて独自の詩的自然哲学からのみ演繹される⁵²⁾」と述べたのは、正しい。

上述の観点に立って、第2節での万物の神からの分離を、詩人の心理面から考察すれば、それは、第1節で述べられた危機の実現、すなわち、精神としての老人と、彼をまさに圧倒せんとする感情——Machtgebärde という語にその激しさが現われている——との分離である。彼は、自分が最も恐れており、克服せねばならぬ事柄を、神話という転化された形において、実際に起こってしまった破局として提示し、その苦痛 (ein schmerzlich Ach!) を、不完全な現実世界全体⁵³⁾のものとして、感じとる。一見隔絶しているように見える第1節と第2節との間の心理的統一は、以上のように解釈できる。

続く第3節では、前節で与えられた原因の悲惨な結果が描き出されている。

光が出現して闇は身をしりぞけ、諸元素は互から分れ散って、各々が「取り乱した想い⁵⁴⁾」のうちに、内実のない広がりのみを求める。そして、限りない空間のうちに世界は固定化して発展の契機を失い、そこには、あこがれも響きもなくなってしまう。

第4節冒頭に述べられている全てのものの沈黙、静止、そして荒廢のなかでの初めての神の孤独に、有機的の自己の重要な一部である感情から疎外された精神、すなわち、情熱をもはや自己同化できなくなった老人の悲惨を重複させて読みとることは、不可能であろうか。今、この危機という側面において、自己と世界との運命の一致を確認しておくことが、後での、融和という側面における自己と世界との一致を可能にする必要条件となっているのではなからうか。

次の第3行からは、これまで描かれてきた分裂を調停し、再結合させる過程が歌われ、そして、この後半部こそ、この詩の、より重要な部分なのである。それは、詩人にとって、現実面での恋人との「再会」を真に自己のものとして受け入れる過程、すなわち、心理面での真の「再会」を成し遂げる過程である。

「そこで神は曙光を創った

曙光は、苦悶をあわれみ

混濁のなかから⁵⁵⁾

鳴り響く⁵⁶⁾光の絢⁵⁷⁾をひろげた」

ゲーテの色彩理論では、色彩は、光が闇によって制限・緩和されることで生ずる⁵⁸⁾。それゆえ、夜と昼を結ぶ曙光は、分裂した光と闇との調停者であり、「宇宙的愛の荷ない手⁵⁹⁾」である。その曙光がつむぎ出す「鳴り響く光の絢」は、

全世界の沈黙と静止を止揚する愛による生成活動である⁶⁰⁾。

このようにして「今や、互に別れ背いたものが再び愛し合えるようになり、」全宇宙的局面においては危機が克服され、融和が可能になったが、同時に、詩人の内部においても、自己の感情との和解が達成されているのである。それが、どのような意識の働きを通じてなされたものであるのか、を知るには、曙光のもつ特性を再び考察しなければならない。すなわち、曙光は、「太陽の極度にエネルギー的な光⁶¹⁾」が、制限・緩和されて生じたものなのである。詩人は、曙光を思い浮かべることによって、彼の情熱——永遠の奥底から噴出する灼熱の炎⁶²⁾——を、緩和された形に転換しようと試み、成功しているのである。この過程は、丁度ファウストが、眩い太陽に背を向け、光を、進み出る滝の飛沫のなかに「七色の虹の変転しつつも存続する存在⁶³⁾」として認識する行為に、なぞらえることができる。ファウストにおける虹と、ここでの「光の絢」は、現象的に共通するばかりではなく、心理的にも同じ本質と働きを帯びている。

第5節では、神話世界における万物の再会の有様が、語られる。「互に属しあうもの」は、性急に相手を求めあい、

「そして限りなき生命に

感情と輝きがもどっている」

この2行は、明らかに第3節の、

「限りなき空間のうちに凝固し

あこがれもなく、響きもなかった」

と対比されて書かれている。かつては恐怖を感じさせる無限性を備えていた空虚な⁶⁴⁾「空間」は、今や喜ばしい無限性を備えた豊かな「生命」として受けとめられ、失なわれていた「あこがれ」のためには「感情」が、絶えていた「響き」のためには「輝き⁶⁵⁾」が、もどってきている⁶⁶⁾。見出した相手と結ばれてさえいれば、その方法が、どのように荒々しく圧倒的なものであろうとも——掴みかかろうと、引きさらおうと——もはや詩人の心を乱す要因とはなりえない。このようにして遂に、世界と彼の運命が、比喩の上でも、また心理面でも一致したと感じえたとき、彼は、

「アラーはもはや創造せずとも良い

私たちがアラーの世界を創っている」

と歌い、かろうじてアラーという名に、東方的要素を保持する余裕を得た⁶⁷⁾。ここでの「私たち」とは、愛しあうものたち全てであり⁶⁸⁾、愛しあうものたちによる世界の創造は、第5節の過程で、既に始まっているのである。

そして、第6節冒頭のただ1語「それゆえ (So)」に、以上の宇宙創造と情

熱同化の過程を見事に収約し、詩人は、恋人に話しかけるようにして、自分たちの再会の意味を説く。

彼が「曙光の翼」によって、恋人の口元へと引きよせられたのは、この創造の行為の一環なのであり、かつては奈落と思われた夜でさえも、幾千もの星々を印章として、この結びつきを嘉してくれる。世界との合致を成し遂げた2人は「典型⁶⁹⁾」と呼ばれて当然である。また、「典型」を規定する「喜びと悩みにおいて」は、第1節における「苦痛 (Schmerz)」と「喜び (Freude)」との同時性の見事な意味転化である。かつては危機の原因をなした相克する感情が、今や2人の愛の普遍性を宣言する働きを帯びている。この愛するものたちが創ってゆく世界のなかでは、2度目の創造の言葉も、「典型」となった2人を、2度と分てる筈もない。

このようにして、ゲーテは、マリアンネとの愛を普遍にまで高めるという非常手段により、かろうじて目前の危機を克服したが、その危機の本質が、彼が老人であるという事実と深く関連していたように、その克服の方法もまた、古典主義時代を経て「理念が……既に確固たるものとなり⁷⁰⁾」象徴を、「意のままに⁷¹⁾」扱えるようになっていた老人にのみ、可能なものだったのである。

注

- 1) Haller, Horst: Goethes Gedicht „Wiederfinden“. Ein Beitrag zur Quellenfrage seiner Kosmogonie. In: Pädagogische Rundschau. 15, 1961. S. 101-104. S. 102.
- 2) Vgl. Burdach, Konrad: Goethes West-östlicher Divan in biographischer und zeitgeschichtlicher Beleuchtung. In: Goethe-Jahrbuch, XVII. Bd. (1896) S. 3-40., wiedergedruckt in: Deutsches Vierteljahresschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte, Buchreihe Bd. 3. 1926. S. 282-324. 本論では後者を使用した。S. 313. 以下 Vierteljahresschrift と略記する。

マリアンネと再会した9月23日と、手稿に記された日付けの24日の間にできた、と推定される。また、マルクが問題としている訂正部分は、どの範囲までが後日のものであるのか、推測の決定的な手段はなく、かつそれは、ここでの機会詩であるという解釈に、影響を及ぼすものではない。

Vgl. Marg, Walter: Goethes „Wiederfinden“. In: Euphorion 46. 1952. S. 59-79.

- 3) Staiger, E.: Goethe Bd. 3. Zürich und Freiburg i. Br. Atlantis Verlag. 1959. S. 52.
- 4) その際に参考にした文献は、次のとおりである。

Pyritz, H.: Goethe und Marianne von Willemer, eine biographische Studie. 3. Aufl. Stuttgart. J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung. 1948.

Brandes, G.: Goethe. 6. Aufl. Berlin. ERICH REISS Verlag. 1922. übersetzt

von Erich Holm und Emilie Stein.

Korff, H. A.: Geist der Goethezeit. IV. Teil. Leipzig. Koehler & Amelang. 1953. 6. Kapitel. S. 471-513.

Grimm, Hermann: Goethe und Suleika. In: Preußische Jahrbücher 24, 1869. S. 1-21., wiedergedruckt in: Studien zum West-östlichen Divan Goethes. Hrsg. von E. Lohner. Wege der Forschung. Band CCLXXXVII. Darmstadt. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. 1971. S. 285-309. 本論では後者を使用した。

- 5) Pyritz: a. a. O., S. 19.
- 6) Pyritz: a. a. O., S. 25.
- 7) „Daß Suleika von Jussuph entzückt war,“ In: Goethes Werke. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden und 1 Registerband. Hrsg. von Erich Trunz. Hamburg 1948-1964. 8. Aufl. 以下 H. A. と略記する。Bd. 2. S. 62. この詩で初めて、ゲーテはマリアンネをズライカと呼び、次の „Da du nun Suleika heißest“ で、自らをハーテムと名乗っている。
- 8a) Trunz: H. A. Bd. 2. S. 570.
- 8b) „Schlechter Trost“. H. A. Bd. 2. S. 30.
- 9) Korff: Geist der Goethezeit, IV. a. a. O., S. 487.
- 10) Pyritz: Goethe und Marianne von Willemer., a. a. O., S. 32.
- 11) Pyritz: a. a. O., S. 34.
- 12) In: „Hegire“. H. A. Bd. 2. S. 7.
- 13) Gundolf, F.: Goethe. Georg Bondi in Berlin. 1925. S. 639.
- 14) „Der Geist gehört vorzüglich dem Alter...“ In: „Allgemeinstes“ in „Noten und Abhandlungen zu besserem Verständnis des West-östlichen Divans.“ H. A. Bd. 2. S. 165.
- 15) Vgl. „Hegire“
- 16) „Phänomen“. H. A. Bd. 2. S. 13.
- 17) Vgl. „Im Islam leben und sterben wir alle.“ In: „Buch der Sprüche“. H. A. Bd. 2. S. 56.
- 18) Schulz, W.: Goethes Deutung des Unendlichen im West-östlichen Divan. In: Goethe 10 (1947). S. 268-288. S. 276.
- 19) Scherer, W.: zitiert in Pyritz: Goethe und Marianne von Willemer. a. a. O., S. 58.
- 20) Burdach: Vierteljahresschrift. S. 307.
- 21) Burdach: Vierteljahresschrift. a. a. O., S. 308.
- 22) Pyritz: Goethe und Marianne von Willemer. a. a. O., S. 34. 意訳である。
- 23) Düntzer, H.: Goethes West-östlicher Divan. Leipzig. 1875. S. 156., zitiert in Pyritz: a. a. O., S. 57.
- 24) ゲーテは、この危険性を既に予感していたように思われる。この旅行初期の彼の行動は、危険を避けようとしつつも、その魅力に心を動かされていた現れであろう。
- 25) „Der Gott und die Bajadere“. H. A. Bd. 1. S. 273ff.
- 26) Sulpiz Boisserée. 16. September 1815. In: Goethes Gespräche. eine Sammlung zeitgenössischer Berichte aus seinem Umgang auf Grund der Ausgabe und des

- Nachlasses von Flodoard Freiherrn von Biedermann ergänzt und herausgegeben von Wolfgang Herwig. Artemis Verlag, Zürich und Stuttgart. Bd. 2. (1969). S. 1088f.
- 27) Boissérée. 17. September 1815. a. a. O., S. 1089.
 - 28) ebd.
 - 29) Vgl. Burdach: Vierteljahresschrift. a. a. O., S. 310.
 - 30) Brandes: Goethe. a. a. O., S. 524.
 - 31) „Als ich auf dem Euphrat schiffte,“ H. A. Bd. 2. S. 64f.
 - 32) Grimm, H.: Goethe und Suleika. a. a. O., S. 302f.
 - 33) 問題の詩が、最初からゲーテのものであるのならば、彼は、ハイデルベルクでの再会の後に使った Morgenröte-Hatem ほど決定的なものではないにせよ、彼の方から、極く僅かに仮面をもち上げてみせたことになる。この詩について、マイアーは、(マリアンネの作とは) 証明できないと述べ、言語的に高度に濃縮された第三行は、ゲーテ自分によってのみ打ち出されるものである、としている。Vgl. Maier, H. A.: Goethe; West-östlicher Divan. Kritische Ausgabe der Gedichte mit textgeschichtlichem Kommentar von Hans Albert Maier. 2. Bde. Max Niemeyer Verlag. Tübingen. 1965., Kommentar Band. S. 284f.
 - 34) Korff: Geist der Goethezeit. IV. a. a. O., S. 491.
 - 35) Pyritz: Goethe und Marianne... a. a. O., S. 38.
 - 36) Pyritz: Goethe und Marianne... a. a. O., S. 41.
 - 37) S. Boissérée. 23. September 1815. Goethes Gespräche. a. a. O., S. 1096. 訳に関しては、「菊池栄一訳 ゲーテ対話録。ビーダーマン編。第 II 巻」白水社。1963。S. 407f. を参考にさせてもらった。
 - 38) ebd.
 - 39) H. A. Bd. 2. S. 83f.
 - 40) Ihekweazu, Edith: Goethes West-östlicher Divan. Untersuchungen zur Struktur des lyrischen Zyklus. Geistes- und sozialwissenschaftliche Dissertationen 14. Hartmut Lüdke Verlag. Hamburg. 1971. S. 305.
 - 41) „Ist's möglich, daß ich Liebchen dich kose,“ H. A. Bd. 2. S. 64.
 - 42) イーエクヴェアツは、喜びと苦悩がともに現在形で書かれていることを、意識的である、としている。すなわち、別離は苦痛で「あった」のではなく、現在において苦痛で「ある。」Vgl. Ihekweazu: Goethes West-östlicher Divan. a. a. O., S. 307.
 - 43) „Faust. 2. Teil.“ V. 6272. H. A. Bd. 3. S. 193. Vgl. Müller, J.: Der Augenblick ist Ewigkeit. Goethestudien. Leipzig. Koehler & Amelang. 1960. S. 163. auch: Marg: Goethes „Wiederfinden“. a. a. O., S. 73.
 - 44) Pyritz: Goethe und Marianne... a. a. O., S. 44.
 - 45) Burdach: Goethes Sämtliche Werke. Jubiläums-Ausgabe. Hrsg. von Eduard von der Hellen. 40 Bde. und 1 Registerband. Stuttgart und Berlin o. J. (1902-1912). Bd. 5: West-östlicher Divan. Hrsg. von Konrad Burdach. o. J. (1905). S. 397. 以下 JA. と略記する。
 - 46) Staiger: Goethe. Bd. 3. a. a. O., S. 52f.
 - 47) Marg: Goethes „Wiederfinden“ a. a. O., S. 67ff.

- 48) Haller: Goethes Gedicht „Wiederfinden.“ a. a. O., S. 102ff.
- 49) Luther, Gisela: Goethes „Wiederfinden“. In: Interpretationen zum West-östlichen Divan Goethes. Hrsg. von E. Lohner. Wege der Forschung. Band CCLXXXVIII. Darmstadt. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. 1973. S. 250-276.
- 50) Korff: Geist der Goethezeit. II. 8. unveränderte Auflage. Leipzig. Koehler & Amelang. 1966. S. 36.
- 51) ebd.
- 52) Burdach: JA. Bd. 5. S. 397.
- 53) コンメルルの説によれば,「現実」が複数となっているのは, 理念と対比されてである。Kommerell, M.: Gedanken über Gedichte. Vittorio Klostermann. Frankfurt a. M. 1956. S. 295.
- また, ブルダッハは,「全ての地上的存在は, その本性に従って, 不完全性と苦悩にとりまかれているからである。」と述べている。Burdach: JA. Bd. 5. S. 397.
- 54) 第三節第五行の wild は, wüst と対にして, verworren と解釈するのが, 適当であろう。グリムのドイツ語辞典は, wild の説明として „*wirr, ungeordnet, verworren, ziel- und planlos, übertrieben; gerne in verbindung wie wild und verwirrt, wild und verworren, wild und wüst,...*“ と述べ, „*von geistig wahrnehmbarem, namentlich von wirren gedanken und gefühlen*“ の用例として, ゲーテの次の個所を挙げている。„*aber im innern (Albertinens) sah es noch wilder, noch wüster aus.*“ In: „Wilhelm Meisters Wanderjahre.“ 3. Buch. 10. Kap., H. A. Bd. 8. S. 403.
- 55) ルターは, „dem Trüben“ を „für die im Materiellen Befangenen“ すなわち, 利害の三格としているが, 説得性を持たない。Vgl. Luther, G.: Goethes „Wiederfinden“. a. a. O., S. 266. グリムのドイツ語辞典やブルダッハの述べているように „(aus) dem Trüben“ と解釈する方が, 自然であろう。Vgl. Grimm: Deutsches Wörterbuch, „entwickeln.“, Burdach: Vierteljahresschrift. a. a. O., S. 313. また, この「混濁」は, イーエクヴェアツがそうしているように, 「カオス」と言いかえても, 良いものであろう。Vgl. Ihekweazu: Goethes West-östlicher Divan. a. a. O. S., 315.
- 56) 曙光が音を立てることは, 『ファウスト』にも描かれている。Vgl. „Faust“ 2. Teil. 1. Akt. V. 4666ff., H. A. Bd. 3. S. 147f. また, ゲーテは, 『色彩論』の「音響学との関連」で, 色彩と音の共通性にも言及している。Vgl. „Zur Farbenlehre. Didaktischer Teil. Verhältnis zur Tonlehre.“, H. A. Bd. 13. S. 490f.
- 57) „Farbenspiel“ は, グリムのドイツ語辞典に, „*der in einander fließendes schein der farben*“ とあり, いわゆる「玉虫色, 光彩陸離」を指す語であるが, ここでゲーテは, 次の注 58) に挙げた例のような, 種々の条件のもとに異なった色彩として現われる光の華麗な変化, を思い浮かべていると受けとれ, 「光の絢」という訳をあてはめた。
- 58) z. B. „Zur Farbenlehre. Didaktischer Teil. §. 150.“ H. A. Bd. 13. S. 362. 「太陽や, 酸素のなかで燃えている燐のように極度にエネルギーな光は, 眩く, 無色である。それゆえ, 恒星の光もまた, 概ね無色で我々に届く。この光は, しかしほんの僅か濁った (trüb) 媒質を通してみると, 我々には, 黄色に見える。そのような媒質の濁りがふえるか, 又は, その深みが増すと, 我々は, その光が餘々に赤

黄色を帯びるのを認め、その色は、ついには紅玉色にまで、たかまる。」

- 59) Pyritz: Goethe und Marianne... a. a. O., S. 44.
- 60) Vgl. Burdach: JA. Bd. 5. S. 398.
- 61) 注 58) 参照。
- 62) „Faust. 2. Teil.“ V. 4707f., H. A. Bd. 3. S. 148.
- 63) „Faust. 2. Teil.“ V. 4722., H. A. Bd. 3. S. 149.
- 64) Vgl. Burdach: JA. Bd. 5. S. 398.
- 65) ゲーテは、Blick を「目差し」と「輝き」の両方の意味で用いていた。グリムのドイツ語辞典は、*„auch wird der aufgehenden, sinkenden, leuchtenden sonne blick beigelegt:“* として、『庶出の娘』（五幕一場。H. A. Bd. 5. S. 295）、『親和力』（第一部第十三章。H. A. Bd. 6. S. 327）、『徒弟時代』（第八巻第二章。H. A. Bd. 7. S. 510）、『ヘルマンとドロテア』（第八歌第三・四行。H. A. Bd. 2. S. 498）の例を挙げている。最後の例、
 „Aus dem Schleier bald hier, bald dort mit glühenden Blicken
 Strahlend über das Feld die ahnungsvolle Beleuchtung.“
 を、佐藤通次は、
 「ここかしこヴェールを漏れて、燃ゆる光を
 野面の上にうす気味わるく投げかけてゐる。」
 と訳している。（『改訳 ヘルマンとドロテア』佐藤通次訳。岩波文庫。赤四〇五-五。1976。第27刷。143頁。）
 この個所での Blick は、「あこがれ」に「感情」が対応したように、「響き」に対応できる特性を備えていなければならない。すなわち、Blick は、愛としての曙光——光の絢——の一つの属性であり、「眼が太陽のようであれば、どうして私たちが光を見ることができようか」（„Zur Farbenlehre. Didaktischer Teil. Entwurf einer Farbenlehre. Einleitung.“ H. A. Bd. 13. S. 324.）との思想にもとづく、「（自らのうちに光を宿した眼の）目差し」である。
- 66) 全てのものは、かつて神の胸のうちに、統一として存在していた、と考えられる。単なる kehren を zurückkehren の意味に使った例として、グリムのドイツ語辞典は、「ゲッツ」（第五幕第二場。H. A. Bd. 4. S. 160）等を、挙げている。
- 67) 「東方的色彩は、アラーという名にのみ、間に合せて保たれている。」とシュタイガーは述べている。Vgl. Staiger: Goethe. a. a. O., S. 52.
- 68) Vgl. Pyritz: Goethe und Marianne... a. a. O., S. 44., Marg: Goethes „Wiederfinden“ a. a. O., S. 75., Burdach: Vierteljahresschrift. a. a. O., S. 313.
- 69) „Musterhaft“ の意味を、ブルダッハは、„typisch“ とし、シュタイガーは、„Beispiel“ と言い換えている。Vgl. Burdach: JA. Bd. 5. S. 399., Staiger: Goethe. a. a. O., S. 53.
- 70) Vgl. Staiger: Goethe: „Sommernacht“. In: Meisterwerke deutscher Sprache aus dem neunzehnten Jahrhundert. Zürich. Atlantis-Verlag 1948. S. 119-135., wiedergedruckt in: Interpretationen zum West-östlichen Divan Goethes. 注 49) と同書。S. 39-54. ここでは後者を使用。S. 49.
- 71) ebd.